2025年3月9日（日）第二礼拝「エン・ハコレ」士師記15章18～20節

「エン・ハコレ」とは、「叫ぶ者の泉」という意味です。サムソンが神様に向かって叫んだ時、泉が与えられたように、神様は叫ぶ全ての者たちにいのちの泉を与えてくださいます。

第一番目、敵に苦しめられるイスラエルです。士師の時代、イスラエルは神様の恵みを受け、カナンの七部族と戦って勝利し、平穏な生活を送っていました。しかし、イスラエルが偶像を拝みだすと、周囲の部族が強くなり、彼らを苦しめるようになりました。その極限の苦しみの中で、イスラエルは悔い改め、主に叫びました。すると、神様が聖霊を注ぎ、士師を起こされたのです。士師は主の力を受け、敵を奇跡的に打ち破りました。

今日の本文は、ユダの人々が四十年間ペリシテの支配下で苦しんでいた頃の話です。イスラエルが主に叫び求めると、神様はサムソンを送られました。ナジル人として誓約していたサムソンは、主の力を受けていました。サムソンはペリシテ人の女性と結婚しましたが、その舅が裏切り、自分の娘を別の人に嫁がせました。怒ったサムソンは、三百匹のジャッカルの尾を繋いで火をつけ、穀物とぶどう畑を燃やしてしまいました。大損害を受けたペリシテ人たちは怒り、ユダの人たちを脅迫したところ、ユダの人たちはサムソンを綱で縛ってペリシテ人に引き渡してしまいました。ペリシテ人が殺意を抱いて近づいた時、サムソンに主の霊が激しく下り、彼を縛っていた綱は、火のついた亜麻糸のようになって手から解け落ちました。そして、サムソンはろばのあご骨で千人のペリシテ人を打ち殺したのです。同様に、私たちに主の霊が下る時、心が変えられ、力が与えられ、主に用いられる器となるのです。

第二番目、叫ぶ祈りです。サムソンは大勝利をした後、喉が非常に渇き、敵の手に落ちる寸前でした。サムソンが主に叫んで祈った時、神様は泉（エン・ハコレ）を与えられました。その水を飲んだサムソンは、元気を回復しました。これが叫ぶ者に与えられる泉です。私たちは大きな勝利の後に渇きが来るような弱い者です。ですから、勝利の後も神様を求め続け、満たされ続けなければいけません。私たちが神様に叫び祈るなら、聖霊の湧き水が与えられ、癒しと力が与えられます。それは個人の癒しだけでなく、家庭や国も癒され変えられていきます。韓国も苦境の中で熱心に叫ぶ祈りをしました。その結果、韓国の大統領は牢の中で聖書を熱心に読み、主に出会いました。そして、ついに先日牢から解放されたのです。

第三番目、くぼんだ所が裂かれました。くぼんだ所とは、マクティシュと言い、臼で打ったような、傷を受けた場所です。サムソンは仲間であるユダ部族から裏切られました。この裏切られ、傷ついた所(絶望、貧困、苦痛)がくぼんだ所、痛みのある所です。ある兄弟は、急に湧いて来る怒りをコントロールできないことに苦しんでいました。子どもの頃、彼の家族は貧しく、親族の所で働いていた母親はいじめられていました。彼の怒りはそこから来るものでした。祈りの中で、その記憶に主が現れてくださり、彼の傷は癒され、心が明るくなったそうです。くぼんだ所から叫んで祈る時、泉が湧き、自分だけではなく、家族も周りの人たちもその泉から飲んで癒されるのです。アーメン！